

(様式 1)

令和 7 年度 学力向上を図るための全体計画

学校名	墨田区立立花吾嬬の森小学校
校長名	向井 一郎

1 本校の学力に関する状況

(1) 墨田区学習状況調査結果から

成 果	課 題
・全学年を通して、国語の数値が向上している。特に 5, 6 年児童の力が伸びた。 ・社会科の「思考・判断・表現」の数値が上がっている。 ・算数については、唯一第 5 学年の「知識・技能」だけが目標値に 8.5 ポイント足りないが、全体を通して数値が前年度よりも向上している。 ◎以上のことから、本校で取り組んできた校内研究「読み取る力の向上」及び、算数科少人数指導(全学年で実施)が効果を表してきていると考えている。	・理科については、全ての学年で目標値を下回っている。特に昨年度第 5 学年(4 年時)に目標値を上回る結果を示していただけに、理科教育の方法に課題があるという前提で指導方法を見直したい。 ・5.6 年生の社会科での「知識・技能」の数値が下がっている。知識の定着への一層の努力が必要である。 △昨年度は理科指導に外部の指導員を補助とし参加させ、全員が分かる授業展開を目指したが、まだまだ知識を得るところまで入っていなかった。

(2) 意識調査結果から

成 果	課 題
・全校の 97% の児童が学校生活を楽しく送り、91% が学習を楽しんでいる。 ・どの学年も家庭における生活習慣が整いつつある。家庭学習も行えている。(85%) ・進んで学習に取り組んでいる数は全体で 91% となっている。特に一年児童は 100% である。 ・進んで発表しようとしている児童は 75% である。 ・勉強内容が分からない時などに質問などをして最後まであきらめない児童は 85% である。 ・読書への意欲が高い児童は 78% である。	・進んで学習に取り組んでいるとしている児童は、全校の 91% であるが、9% の意欲を高めることは最大の課題である。これは実数にすると 31 人であり、6 学年で平均すると各学年 5 人程度いることになる。 ・発表の意欲に関して 75% がその意志があるが 50 名の児童の意欲を高める必要がある。 ・疑問を追求しようとする意欲が、全体では 85% であるが、学年が上がるにつれて下がっている。(1 年 : 92% 2 年 : 92% 3 年 : 82% 4 年 90% 5 年 : 77%、6 年 : 72%)

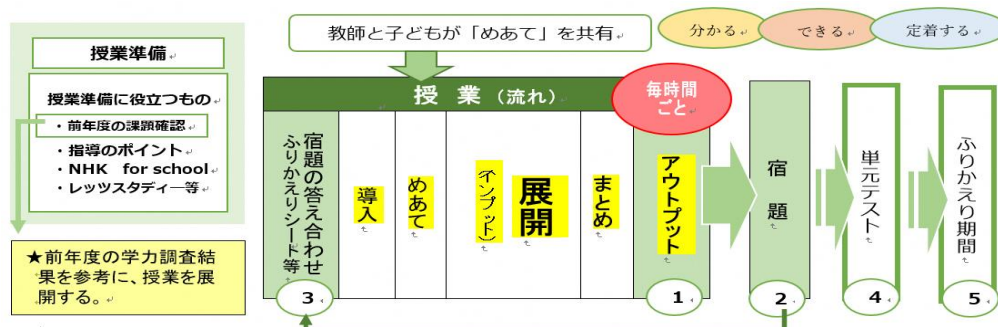
(3) 墨田区学習状況調査や意識調査以外から明らかになっている学習に関する状況

成 果	課 題
・全学級においてほぼ全員の児童が、家庭学習に取り組むことができている。 ・振り返りシートや復習問題に意欲的に取り組む姿が、どの学年でも多く見られている。 ・全校で読書量が増えている。読書への意欲が高まっている。(ただし物語よりも、ハウツーものが多い) ・課題を見つけ、それを解き明かしていく学習への意欲が見られる。(図書館で調べる学習への意欲が高まり、3年生以上ではほぼ全員が取り組んでいる。) ・「立吾しぐさ」を守ろうという意識が強く(96%)、全学年で規範意識が高い。	・学年により課題の量に差がある。また、提出はされていても、取組の仕方に差がある。更に家庭との連携が必要である。 ・振り返りシートは印刷をして全学年分用意してあるのでいつでも利用することができるが、タブレット上でミライシードを使用するタイミングと、その内容は検討し、学習に生かすことができるようにしなくてはならない。 ・学校図書館の本の種類、冊数も増え、利用が増え、読書数も増えているが、選んだ書物が児童の年齢に適していない場合もある。読書の質を高める必要がある。 ・図書を通してはもちろん、ネット上の情報の適切な選択・活用の指導が更に不可欠である。

2 本年度の学力向上に関する主な取組

(1) 基礎・基本の定着

- 「めあて」をはっきりさせて授業を進める。その達成度を確認するために授業観察を行う。
- 授業で、インプットした内容を確実に定着させるため、授業の最後に「ふりかえりシート」「問題データベース(社会・理科)」を活用してアウトプットの時間を設定し定着を図る。教科の特性や授業の流れなどを考慮し、一単位時間のアウトプットの時間を5分程度とする。
- 授業の中で、導入場面、調べて考える場面、友達と交流をする場面、そして、考えを深める場面を用意し、単調で教師主導型の授業とならないように事前に計画し進める。
- タブレット端末のアプリケーションソフトのロイロノートやミライシードなどを適宜活用し、児童相互の意見交流や、自学自習を通して、個別最適な学習を進める。
- 基礎・基本の定着のため、計画的に家庭学習を行う。音読(毎日)、漢字・計算ドリル、週末の日記、「ふりかえりシート」等を学年の実態に応じて宿題として出す。授業の最初に答え合わせし、見直しをする(間違えたままにしない)。
- ふりかえり期間には、そこまでに取り組んできた「ふりかえりシート」「問題データベース」に再度、取り組み、短期記憶を、長期記憶に落とし込んでいく。また、国や区の学力調査問題の過去問を準備し、発展的な問題にもチャレンジしていく。
- 校長が教員の授業観察を行い、授業の最後にアウトプットの時間を設けているかを確認する。
- 高学年においては、理科などで「テストパーク」を用いて評価をしていく。



(2)「読むこと・書くこと・話すこと」の力を高め、言語への関心を高める。

- 「読書活動」の充実を図り、学校図書館の整備、蔵書の充実を進める。特に、調べ学習に適した書物を重点的に増やす。「図書館を使った調べ学習」にも取り組むように支援をする。
- 「朝学習」の時間に、「読み取り学習」に重点をおいたドリルを選び取り組んでいく。
- 教師が綿密な指導計画をたて、その中でノートなどに自分の言葉で書く場面を用意し、児童が読み返して一人で復習することのできるようにする。
- 発達段階に応じて、三行日記、スピーチ原稿、聞き取りカード、日記などを書く場面を多く設けるようにし、書くことへの抵抗感を減らしていく。
- 「話す活動」を授業場面、学級活動場面、さらに学校生活日常場面で増やしていく。
- 3年生からは、国語以外でも、わからない言葉に関心を向けるようにし、児童の「語彙」が増えるようにし国語辞典を積極的に活用していくようにする。
- 校内研究のテーマを「読解力向上を目指す指導のあり方の追究～国語科の「読むこと」に焦点を当てて」とし、年間を通して各学年で「説明文」の読み取りについての研究を強化していく。

(3) 主体的・対話的で深い学びの実現＝自ら学び自ら考える児童の育成

- 「立吾しぐさ」の徹底、特に「聞き目・聞き耳」を重点とし、相手を意識して話し、相手の話の内容を理解しながら聞いたりすることを大事にしていく。
- 各教科の学習において、自分で考えたことを発表し、話し合う機会を設定する。各教室に話型を掲示し、自分の考えを発表したり話し合ったりできるようにする。グループ学習や対話型学習を取り入れ、友達の良さ考えを認め合い、協同して学ぶ意識をもたせながら学習を進めていく。
- タブレット端末（ロイロノートスクール）も効果的に活用し、子供たち同士の情報の共有や話し合いを積極的に行うようにする。
- 各教科において、D層に位置する児童が20～30%いる。この層にいる児童が学んでいることを理解するための手立てを、学年会で検討し、有効な指導法を校内全体で共有していく。

3 「令和8年度 墨田区学習状況調査」における目標

- ・日々の授業の中でふりかえりの時間を設け、アウトプットの機会を確実に設定することで、学んだことが確実に定着し、次の学習に生かしていくことができるようにする。
- ・D層の児童の個別指導を強化し、C層に上がっていくことができるようにする。C層児童が上がることも目指す。D層児童は現在平均して各学年に20%いる。現3年のように7%程度にする。
- ・国語においては、長文読解問題において空欄のまま提出する児童が、2年(17.4%)3年(20.8%)4年(18.4%)5年(14.8%)6年(11.1%)いる。回答時に空欄のままということが減るようにする。
- ・社会科の学習の中で、グラフ、絵図等から発見ができる力をみがき、問題を解く際にもその力を生かすことができるようにする。
- ・算数科については、日常の授業の中でも多様な考えがあることを実感させ、自分の考えを自信をもって表現できるようにする。
- ・理科において観察、実験を増やし、実感的な理解ができるようにする。
- ・高学年の英語指導において、英単語の語彙数を増やし、読み、書き、話すことの基礎を確かなものにする。